

「雪は天から送られた手紙である」

〜雪華という美しい花を発見〜

2月12・13の両日、博物館では、旭川西高校平松和彦^{ひらまつかずひこ}教諭の考案した人工雪発生装置を使って雪の結晶^{せいせい}生成実験を開催します。そこで…。

昭和5年、北海道大学に赴任した中谷宇吉郎博士^{なかやうきちろう}（1900〜1962）は、雪の結晶の美しさに惹かれて、観察のため十勝岳

の山小屋に籠もり、氷点下の世界で3,000枚に及ぶ写真を撮り続けます。やがて、この観察に限界を感じた博士は、雪の結晶を自ら製作してみようと考えました。

幾たびもの試行錯誤と失敗を重ねながら、人類史上最初の人工雪が誕生するのは、昭和11年のこと。博士は、さまざまな気象条件下の「雪」を丹念に観察、気温・水蒸気量と雪の結晶のかたちにある種の相関係数があることを解明し、その成果を「中谷ダイヤグラム」という図表によって表現したのです。表題の引用句は、地上に舞い降りる雪の形から気象条件を読み解くことができるという実証結果を、平易な文体によつ



平松式人工雪発生装置でつくった雪の結晶

て表現した名文といえましよう。ところで、数多の博士の著作中に、「『雪華図説』の研究」という論考が存在します。曰く、「雪の結晶の記録で有名なものは、英国の気象学者ゼームス・グレイシャーの模写図であって、彼は一八五五年、即ち『雪華図説』にお

くれること三十二年に、百五十一箇の雪華の模写図を発表してゐる。彼の仕事は顕微鏡写真の発達する以前の雪華図としては、最も精巧を極めたものといふことになつてゐるが、公平に見て私は土井利位の『雪華図説』はそれに劣らぬ立派なものであると思つてゐる（ルビは筆者）」。はじめて顕微鏡で雪の結晶を覗いたときの感動とその後の厳しい観察で重ねた腐心。『雪華図説』を賛美したこの雪氷学^{せいひんがく}の世界的権威は、利位に自分の姿を重ね合わせていたのかも知れません。

雪を愛した兩人の情熱、12・13日の実験に参加する子供たちは、きつと感じ取ってくれることでしょう。

古河歴史博物館学芸員 永用俊彦